

大使コラム（2013年5月）

5月、リスボンでは雨の多かった冬もようやく終わり、まだ肌寒い日もありますが、4月中旬からやっと春らしくなりました。郊外の野山でも、野草が色とりどりの花を咲かせ、本格的な春の到来を告げています。

ポルトガルで、先月の第一週に立て続けに起きた政治面での激震は既述の通りですが、その後、この後始末とも言うべきいくつかの動きが続きました。

まず政府は、違憲判決により予想以上の不足が出た予算に、補正予算を作成せねばなりませんでした。今年の財政赤字の削減がトロイカ合意に達することを示す計画を提出できないと、今期分の資金援助が出ないのです。この条件は、政府が訴えてきたトロイカ融資の返済条件の緩和（返済期限の延長）のためにも必要でした。

政府にも国民にも、経済が疲弊する中で、新たな緊縮策を考えるという厳しい話です。40億ユーロの「構造的歳出削減策」を4月末までにトロイカに提示するという、抵抗の大きい仕事も控えていました。違憲判決で、巨大な障壁がさらに高くなったように思えたことでしょう。

違憲判決の直後には担当の財務大臣が辞意を漏らし、大統領との会見で慰留されるとの一幕もあったようです。しかし、補正予算と「構造的歳出削減策」という当面の作業は、その後なんとか進んでいる模様です。

また、ポルトガル政府は、既発の国債で2016年及び21年に大型償還があるため、トロイカ融資の返済期限を延期して欲しいと訴えてきた訳です。これに対し、先月のユーログループとEUの財務大臣会合では、アイルランドとともに、融資のEU負担分の返済を7年間に延長すると原則合意されました。当国が金融市場に復帰し、長期国債（10年もの）を起債できることにつながるもので、一つの前進でした。

このような動きの中で、4月25日の「革命記念日」には、国会で恒例の記念式典があり、各界の人々や外交団も招待されました。各党の代表が順に演説を行い、野党は改めて政府の緊縮策への批判を行いました。2週間前、ここで内閣不信任決議が否決されたばかりでもあり、野党の政府批判は国民の窮状を背景にしたものとはいえ、やや新味と迫力に欠けたように見えました。

これに対し、国会議長のと最後に登壇した大統領は、緊縮策による犠牲に耐えてきた国民の責任感をたたえつつ、この危機にあっては、政治家は野党といえども政治的軋轢を優先するような行動は慎むべきだと、強い調子の演説を行いました。その基調は、年頭の演説と同じように、国民の一致団結が重要との趣旨でしたが、野党の対応を批判する所では、野党席も声を失っているように見えました。あとで、野党から大統領はその立場を超えて政府擁護を行ったと不満の声も出ました。しかし、議場の雰囲気は、長期間内閣を組織できない諸政党に対し、老大統領が叱責した先日のイタリア国会での光景を思い出させるように感じた

のは、私だけではなかったと思います。

4月の終わりには、野党の社会党の大会がありました。同党のセグーロ書記長が、次期総選挙では党のためではなく国のために勝利しようと訴えて、トロイカ合意に沿った具体的な提案を行ったのも、こうした政治の経緯を意識した面もあるのではと感じた次第です。

季節の変わり目にあたり、皆様にはご自愛の程をお祈り申し上げます。